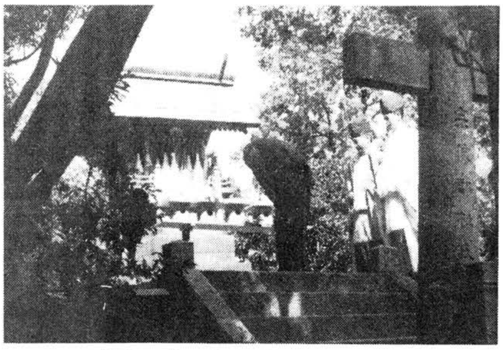
宗像

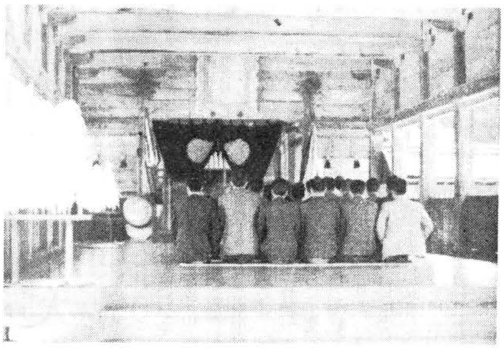
毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊26番
定価 一年 送料共500円

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
九三七二番
振替口座京都一五八九一番

酒造報賽の祭行わる

── 境内末社　松の尾神社 ──


新酒をお供して深く低頭する杜氏組合長


拝殿で奉告感謝祭を行う杜氏組合員

宗像の春は杜氏さんと共に訪れる。毎年境内の正月桜がほころび、万物に漸く活気がみなぎる頃、酒ビンを提げた杜氏さんが新酒の香りをただよわせながら、三々五々現われる。満面に笑を浮かべたその顔を見れば、誰でも、自づと春を感じる。春の言葉の起りは一説によれば「象の張り満つる」ところより来ると言う。これからすれば三ケ月余りの永い日々を室屋に籠り慈しみ醸した豊かな酒が樽に張りあふれ出る。その酒を携えて来る杜氏さんを見て春を感ずるのは無理からぬ事であろう。

ともあれ、三月十九日午前十一時恒例により、北筑杜氏組合の主催による酒造報賽祭が境内末社松尾神社に於て斎行された。幸い好天に恵まれ参列した三十名余りの杜氏さんの顔には無事大任を果し得た安らぎの表情が窺えた。戦後は十数名の参列者しかなかった時もあったが、最近は又々隆盛になり、この参列者の多い事が杜氏さんの相互のつながりを強めるとのことであった。祭典終り、社務所で名物のかしわの水炊きで直会が始められる。耺員も参加して酒造りの苦心談に花が咲く。昨年暮の醸造初の時の緊張感はもうここには全くない「早く家に帰って息子に嫁をとってやらにゃ」とか「今年の麦の出来はどうかな」などと早くも心は家郷に飛んでいる。杜氏さん達には農家の人の冬場の仕事の人が多い。彼等は正月になれば 神々が人間に喜びを与えて行くように、毎年冬から春にかけて 人世の喜びを造っては去って行く。帰途につく杜氏さんの背に暖かい春の日ざしが踊っていた。

亦、境内中の島の現鎮座地での松尾神社の祭り日は此の日の祭りで最後となる。天保二年信仰者により現在地に鎮祭されてより人々から親しまれたこの御社も境内地拡張工事のため、末社整備の必要から旧阿弥陀経石あとに御遷座申し上げることになった。

社有財産を再調査

去る三月二十二日、吉武責任役員氏子総代、当社全耺員等二十数名が午前九時社務所に集合、春の日ざしをあびながら多礼山を始め、上高宮の山林を廻った。

終戦以降、耺員の交替があって社有地の境界等引継ぎが充分に為されておらず、実際の土地に当っていなかった為、全耺員が参加して、今回実測調査に踏み切ったものである。

今回の調査に依って、多礼山一部の寄贈の雑木林、高宮参道、斎場、上高宮の境界、氏八幡脇の竹林等不明瞭な地点には杭が打ち込まれ、社有地の面積の実測が正確なものとなった。

尚、書類上の手続きが未完の場所、未登記の地等が判明したので現在早急に解決をするよう計っている。

沖・中両宮春季大祭のおしらせ

四月十五日 午後五時
宵祭｛沖津宮遥拝所／中津宮
◎神賑奉納行事（午後一時）
☆舞踊
☆各部落出演演芸大会

四月十六日
大祭｛御嶽宮　九時／沖津宮遥拝所　九時半／中津宮　十一時

皆様御誘い合わせ御参拝下さいますよう、右御案内申し上げます。

論説

農漁村に於ける青少年教育の反省点

敗戦の混乱と占領の圧力により政治と言わず経済と言わず我が国の社会万般の様相は大変化を惹起し、今日なおそのヒズミが続いている。占領政策の芳ばしからぬ影響を、最も多く被ったものは教育面であろう。今や労働者教員は別として真の教育に携わる者は勿論、識者の間に漸く反省の声が高まりつゝあり、本来の日本人を作る教育への覚醒が芽を吹いてきた。次代の国家の運命を何う青少年の教育指導に、反省期を迎えたのは当然来るべきものが来たの観がある。

人つくりは政治の重要命題でなければならない。就中青少年の養護育成は、その核心の問題たることは論を俟たないが、今こゝにあらゆる地域に共通した教育論議は措いて、農漁村地域に於けるその反省点を挙げて、現状を好転向上させる方途を考えてみたいのである。

農漁村と都会地との青少年の育成事情に大きな差異のあることは、戦前も戦後も同様であろう。比較的に社会の風潮の影響を受けることの少い点は、農漁村に純朴さが残されている状況を観察すれば、判然たるものがある。都会の悪風、好ましからぬ刺戟は農漁村には少いが、文化的視聴機関の普及は全く悪影響なしとせず、非行少年の集団暴行事件など数を増してきた。農村の中学校の卒業式に、多数の私服警官を招いて校舎の内外を警戒してもらわねばならぬとは、教育の場の謝恩の光景とはお義理にも言えたものではない。

反省の第一は先ず家庭である。似て非なる民主々義を呼吸した父兄の無自覚や生活の堕落が、青少年の純情を傷つけている傾向も見逃せない。勿論一部の家庭の勤労意慾の欠乏を指摘しているのであるが、家業を怠り、貧乏は如何にも他人が作ったか社会が押しつけたかのような不平を、その家族近隣に吹聴する。生かじりの人権尊重を口にし、生活権の擁護を勝手に主張して、怠慢による困窮を社会補償によって償わせようとする態度に、家庭教育は全く零にひとしい放置の状態にある例も少くない。親が賭博を常習とし、盗伐密漁で不当の利を追い、司直の手にあげられると人権だ生活権だと無恥な屁理窟をたゝく。その歪んだ権利の主張だけを見習って、青少年は非行化する。

若い教師の地域社会の伝統慣習に対する理解不足も目につく点である。その実体を把握すること不十分で、劃一的な方式に当てはめて指導しようとする。それが学童を通じて父兄との対立感情を深め、家庭の協力が阻まれてゆく。そしてペーパープランによる教育成果の発表過剰も、地域社会の実情無視の結果となり、時には学童の家庭や教育関係者の理解を亡うだけでなく、却て逆効果的反応を呼び起す傾向が注目される。

次は指導者層の派閥的対立と新旧思想の反目である。因襲に根ざす門閥族類の対抗意識が、学校教育の施策の面に、大きな障害となっていることも少くない。これに輪をかけるのが、村落の元老的存在の発言である。古い教員経歴者の多い地域では、若い教師の懐く理念や指導要領に頭から反対し、所謂姑根性を暴露して無意義な衝突となって、教育効果の進展を阻害することもある。新旧思想の対立背反は家庭にもあるように、地域社会に於ても諸種の団体の運営面に現れている。若い指導者の意見を尊重して、効果を見守る雅量が欲しい。骨董品がうるさいと蔑視される前に、真に良き相談相手として親しまれる自省が望ましい。

農漁村に残っている古い慣習には、現代に適応しない欠点も少くない。最も目につくのは、訳もないくだらぬ因襲が今尚根強く遺存されていて、差別観卑屈感が時代に逆行するが如き悪影響を与えていることである。青少年のみでなく若い教師の間にも、その不合理を指摘して反撥する空気が濃厚となってきたことは、むしろ当然の傾向であろう。部落的差別観の如きは、最も打破すべき因襲で、これに対する不満反撥が、青少年に自嘲的非行を犯させる例は少くない。互譲協調の実を挙げることが緊要なる先決問題である。

或る酒造業者の多い農村では、昔ながらの旦那と使用人の主従的因襲の残滓があり、漁村では網元と船子の封建的差別観が階級意識を伝えている。学校でも旦那階級の子弟は、使用人の子弟に優越感を以てのぞみ、差別的態度が払拭されていないところがある。親達の卑屈に係らず抵抗の言動が起る。横暴な富者名家の子弟が悪い事をしても 周囲が父兄の権勢に遠慮して、強くは咎めない。こんな悪習は刈り取らねばならない。一部には教職員組合に対する父兄の強い不満がある。これが学校と家庭との信頼協力を害している点も事実だが、その地域の人望ある教師が、組合の指導的地位についている場合は、比較的良好な状態が持たれる。組合指導者はその地域の信頼を得なければならないだろう。特に非行少年の訓育矯正には、その両親と一体となって当る熱意があってこそ、月給貰いの教師でない。単なる偏向組合員でないという信頼感が生れる。

以上十分に意を尽していないが、ある種の新興宗教に入信の家庭の非協調性が附け加えられる。然しこれは一般の反省点でない。反省の要あるはむしろ既成宗教の人々であろう。世評は社会の苦悩を救い得ない宗教の衰弱を指摘しているが、神仏が無力になったのでなく、そこに住む宗教人が衰弱しているのである。反省の第一矢は先ず宗教人が、頂戴すべきものかも知れない。

阿蒙少言

花の命は短かくて苦しきことのみ多かりき、と林芙美子は嘆じた。若き命の過ぎぬ間に楽しき春は老いやすし、と島崎藤村は歌った。春の命の短かいのを惜しむは、梅がかせぎ、桜がもうける観光地もご同様だが、詩人の心は覗きたくも観光のドル箱に同情したくない。浪費と賃上げ斗争は、うとましき物価の上昇を育て中小企業の倒壊を呼ぶ○愛護して欲しいのは若人の青春「益のない人生とは早死である」とゲーテは言ったが、青春が描く恋愛も結婚も耺務意慾も早死させない用心が肝要でござる○皺だらけの老婆が紙幣を愛惜する話、せっせとお札にアイロンをかけて楽しんでいる衰眼が長い人生に学んだ結論を語っているのか。ツヤ消しと笑いたもうな。残光を浴びる老境、たゞ現在の一時一瞬をわが命の灯をのみ守るに精一杯で、他人の幸福を作る力はない。この長生は有益な人生か○軽率に進学し就耺し、結婚する。貴重な一生を軽率の連続譜、但し軽率に生れたのは自分のせいではないから、出発点だけは反省はいるまい。せめて軽率に死なぬことだが、これが難物○不勉強の受験生「大学の門は狭すぎる」授業料値上げに驚く父兄「大学の門は高すぎる」ラッシュの通勤者「大学の門は多すぎる」と悩みは果てなしアア コウ門○五流の高校から五流の大学への志願者が、ある推薦状を添えたが落第。その大学が四流に格上げされたのでなくて、当人が六流だったゞけのこと。能力以上の番付に上ることを相撲界で「賃貸が高い」と言う由。頭の悪い者が狭い門を志すは悲劇である。○なぜ現在の耺分を選んだのか、頭が悪く、勇気がなく、いつの間にかこうなったんです。もう残りの時間なく当面の王手飛車を救うだけ。

（白雲）

第四十七回　宗像大社献詠歌会詠草

三月七日　於社務所詠草到着順

勝浦　永島意之助
幾世経し庭の老松に比ぶれば、われは若かり共に栄えむ

宮田　片山　一
見はるかす阿蘇九重つなぐ高原の枯草原のはてに陽は没る

神湊　隣船　俊
ボーナス日お祖父ちゃんにとチャンチャンコ渇き哉孫の心や

福岡　高橋　昇
若き日に男の宮と仰ぎ見し久原将軍も百待たで逝く

和布刈　永島　まち
南枝春つげると聞きし梅の花吹雪の庭に匂ふうれしさ

陵厳寺　真鍋　万三
人の子を見て己が子を見る度に届かぬ事の多かりしかな

厚狭　篠田　南洞
綿雪のそれて舞ひ込む犬小屋を覗けば犬の寒しとて出でず

村山田　吉田佐一郎
梅香る吾が前庭の石の間に万両赤く春を彩る

東郷　吉田　信夫
帰り路の窓辺に見ゆるビルの上ほのかにまろき春の月あり

津屋崎　勝田　光一
面会の母といっしょに昼餉とる汽笛は太く短く消えて

戸畑　田中ハッセ
休日を税金整理に追はれつゝ医院に一人夫はこもれり

大濠　江崎　琴子
庭の鯉いとほしみつゝうすらひをくだきて除く春立つあした

津屋崎　麦野　時雄
大仏殿山門の仁王いかめしく不浄衆徒の入るをはばむか

飯塚　萩本　夕照
霜朝の寒さに耐えずをりたちて月の残れる庭に焚火す

吉武　高山徳七郎
五分咲きの花も重げに薄化粧春淡雪の太宰府の梅

沖ノ島　佐藤市五郎
旭日の海に映りて黄金染め光まばゆく波を照して

東郷　小野角次郎
焚火して集る人も豆撒に喊声挙げて神楽殿攻む

〃　小野　花居
如月の陽ざしに誘はれ花の苗移植に花壇の夢を浮べて

内浦　長畑　房江
冬の夜の暁に近く風立つらし枕に近く硝子戸の鳴る

戸畑　伊規須ゆき
憶良大人の旅装ときしは嘉摩郡の鴨生碓井か駅家腑別か

多礼　藤崎保五郎
吾が母の生れ日祝ひくれし文うつらふ乳の香りなつかし

江口　辻野　開造
三寒四温ひねもす悩み多けれどやがてのどかの春は近づく

東郷　藤崎　辰子
まだ馴れぬ耺場に鉄を焼くと云ふ夜勤の吾子にするめ購ひ来ぬ

コロラド　浦野　薫
置き並めし車は丸く雪かむりラジオは報ず0下八度と

吉田　占部　由久
日に一度南天の実を啄みに来る小鳥ありたのしみて待つ

香椎　桜井　秀
冬ざれのおどろが影も映しつゝ水藻は萌えて池の静かさ

〃　桜井　ツ子
明日につゞくわが水仕事待つかたちゴム手袋が夜の土間にあり

福間　尾郷　須恵
枯草の色極りて昏るゝ野に濡れてかすかに光る道見ゆ

吉留　山下しづえ
子の病癒えしいまなほ足裏に冷たさ残るお百度踏みて

東郷　有吉　春子
春を迎ふ夫に着せむと縫ひ急ぐ柔かき布頬に当てゝみつ

勝浦浜　永島　文子
青い鳥探ぬる如く遥かにも犬柘追って筑豊路ゆく

吉留　白木うめの
見はるかす雨のハイウェー走り来て夜霧の街に着けば疲るゝ

〃　松本はぎの
五十年の昔偲ばゆ師の君の尚健やかに居ます嬉しさ

深田　中野　節子
時折りはヒゲの動きて窓近く猫の影うつる霜どけの朝

田島　小野　迪夫
子ら二人庭にたはむるを目守りゐて藪鴬は呆けて聞けり

武丸　立石　昇
小春日を池辺に立てば冬眠の鯉もしづかに泳ぎ出でたり

（四頁下段へつゞく）

宗像談話室
硫黄島

三月中旬の或る日Nは大島中津宮斎館に泊した。春嵐の過ぎた其の夜は波の音もなく、時折渡る風の音が何となく早春の響きを伝えた。ふと、漁船のエンジンの音がした。夜の仕事に出掛けて行くのであろう。規則的なその音が遠ざかって行く。一とNの脳裡をかすめて二十年前の思い出が甦って来た。トントンと響く音がモールス信号を連想させたのである。それは、毎年のように春になると思い出す「硫黄島の玉砕」のことであった。

× ×

トトト・トツー（ライ）の連続音。午前一時頃であったろうか。突然、部下の少年飛行兵に揺り起こされた。

「所長殿、ライ、ライ！」

なに？、と云うや否や、Nは軍袴のままで隣室の通信室に飛び込んだ。急いで「地一号受信機」のレシーバーを耳にあてた。

鳴っている。ライ・ライと。ライというのは軍事機密電報の略号である。これは已むを得ない時のほかは所長が受信しなければならない。

この夜更けにライ電報とは何事であろう。Nは電鍵をつかんで直ちに応答した。相手は何と硫黄島である。十名余りの部下がNを取り囲んだ。

ここ水戸陸軍教導航空通信師団に於て、ライ電報が送受信されるなどということは滅多に無い。異常な緊張感が漲った。

きれいな打ち方でツートト・ツーツートツー（本文）と続いて、流れるような略数字が耳に入る。やがて終止符。それが普通よりも長い尾を引いて消えた。そこでNがはっとした。長い尾の終止符は少年飛行兵教育隊出身者が多く用いる。相手は十八、九才の少年ではないかと思った。

Nは、師団隷下の全国各地少年飛行兵教育隊と連絡する「自隊指揮通信所長」をして居り、彼自身も亦少年飛行兵の教官を兼ねていた。

急いで暗号文を翻訳した。内容を要約すると、

一、沖には約八百隻の敵艦船あり。

一、ここ（硫黄島）の通信所は洞窟。消煙発動発電機を電源としているが、排気ガスの陽炎によって空気がゆがむ。よって昼間は艦砲と爆撃を受ける。

一、四粁先に設置したダブレット空中線は寸断され、夜間補修しているが、陣地縮少と資材の欠乏により今は延長二百米。もうすぐにこの司令部通信所が直接爆撃にさらされるであろう。

一、これが恐らく最後の通信となるであろう。皇軍の健斗と皇国の万才を祈る。

以上であった。泣けて泣けて仕方がなかった。

その夜、丁度泊っていた部隊長に早速報告した。老中佐は

「可哀想にのう、何処かの教育隊出身者が打ったんじゃなあ。皇軍の不敗を信じての戦訓の資料として、特に心掛けてくれたと見える。師団長に報告して、この戦訓を生かして貰おう」

彼も目をしばたいていた。

その日は昭和二十年三月二十四日。それから数日して硫黄島の玉砕が伝えられた。

終戦直前の思い出の一こまである。その昔、年若くして散った幾多の献身のお蔭で今日の日本がある。三月二十四日が近づいた。

Nは曽て彼の青春の情熱を傾けて働いた事を悔いてはいない。

現在神職をしているNは、毎年三月には「硫黄島」を思い出し、自分を警しめることにしている。

漁船の発動機の音が規則的に鳴っている。かすかに響くその音が消えて行くにつれて、Nの回想も終ったのであった。

春の総代会

春うらゝかな、去る三月十日、当社春季大祭をひかえ、社務所に於て、氏子評議員会並に総代会総会が開催された。

この日参集した人々は、庄村氏子会会長以下役員及び総代六十余名で、会は先ず氏子会会長挨拶、続いて、久保宮司の挨拶があり、総会提出すべき諸案について検討、同十一時から総会に移った。

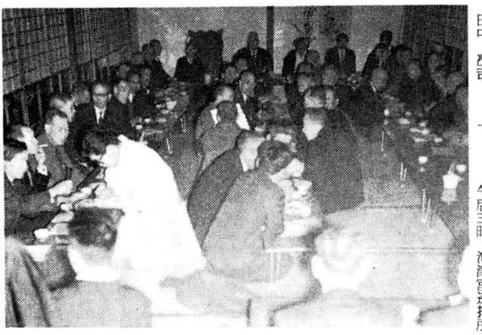
先ず会長挨拶、次いで宮司の一年間に於ける社況が述べられた。

直ちに議題に入り、春季大祭々事表。昭和四十年度氏子会歳入歳出予算案が読上げられ全員の承認を得た。

尚、昭和四十年度氏子納金取纏め方について氏子会長の依頼に対し活発に意見が交され、盛会な中に閉会となった。

なお、本年は氏子会役員改選期に当り、総会閉会後役員の改選が行われ、左記の通り新役員が決定した。

氏子会会長　吉武儀市郎
〃副会長　立石　昇
〃　〃　河辺嘉十郎
〃　〃　妻野　時雄
〃　〃　池浦豊次郎
〃　監事　瀧口　正
〃　古賀権之助
〃　広島　万吉
〃　田中　次吉
〃幹事長　宇都宮淳
幹事　養父　守
〃　升谷良勝
以上



春季大祭祭事表

三月三十一日　午后五時　高宮
〃　六時　総社宵祭
四月一日　午前十時　総社大祭（氏子奉幣、風俗浦安舞）
〃二日　〃　十時　総社大祭
中津宮
四月十五日（旧三月十四日）
午后三時　沖津宮遥拝所
〃　五時　中津宮
〃十六日（旧三月十五日）
午前九時三十分　沖津宮遥拝所
〃十一時　中津宮

神賑行事
三月三十一日　映画（於境内）
四月二日　献茶式（於拝殿）
〃　三日　琴奉納（於清明殿）
〃　四日　舞踊会（於清明殿）
剣道大会（於境内）

当社境外摂社
孔大寺神社例祭

去る三月二日恒例の孔大寺神社の大祭が斎行された。

孔大寺山は標高四四九米、東北にそびえ立つ四ツ塚連山の最高峰で、その分水嶺が本郡と遠賀郡との郡境でもある。この山頂に御社は鎮座せられている。

祭典は午前十一時開始、当社から幣帛が捧げ奉られ、厳粛な内に終了した。この後、御社から参列者に疫病除のお守りとして、赤い実のついた青木の枝に小さい藁草履を添えたものが渡された。

直会は、いろりを囲んで行われその昔の風習を思わせるものがあった。

—◇—◇—

祭典奉仕を終えて、山頂から峰づたいに湯川山へ登る。路なき路をたどり、垂見峠で一息入れ、湯川山々頂に着いた時はすでに日は西に傾いていた。

西日を受けた玄界灘はきらきらと輝き、遥かかなたの洋上に沖の島がぽっかりと浮んで見えた。

肌に感ずるそよ風、小鳥のさえずり、これ等はもう春の到来を告げるかのようであった。ことに沖の島をはっきりと望観し得たのは、今日の祭典の御恵みとも思われた。

春宵千金の風景を惜しみながら下山した。

× ×

社務日誌抄

一日　月次祭斎行。
二日　孔大寺神社祭斎藤権祢宜出向。
四日　郡内小学校教師三十余名宝物館を拝観。
五日　責任役員会開催。阿弥陀経石拓本撮り九大教授四名来社
神湊漁業協同組合落成式、楠本権祢宜出席。
一〇日　評議員会並総代会総会
一一日　出光興産石田専務参拝
一三日　宇都宮祢宜、升谷権祢宜筑前神職会に出席。
一四日　若松高校六十名、俳諧クラブ六十名参拝。赤賀島神社阿曇宮司来社。

福島県の宗像一族参拝

春雨けむる三月十七日の午前九時、約二十名の「宗像族」が参拝した。遠い祖先の発祥地を訪れ、その祖神の大前に額づいて、誠に感慨深げであった。

職員から神社の由緒と往古の宗像族の活躍と雄飛のさま、及び現在の全国的な分布状態等について話を聞いて、一々うなずいていた。

聞く処によると、一行の祖先は大昔、福島県の小名浜港に上陸して、それより川沿いに内陸へ入って行ったとのことで、今でも其の経路に「宗像族」が点々と繁栄しているとのことである。

因みに、福島県には「宗像神社」という神社が約十社ある。何れも一族が祖神を祀ったものであろう。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

卯月のまつり

一日
二日　春季大祭　午前十時

いよいよ実際の農耕作業やあらゆる産業の活動期にはいるに当って、今年の無事繁栄を願って祈願祭を行う。大社では、むかし宝物の保存会をこの頃行った。俗に云う虫干しとこれに併せ行う宝物の展覧である。

三日　王子神社祭

摂社王子神社春祭。唯一の直轄社である為、許斐山頂のお社まで本宮職員が祭典に参向する。

五日　宮地嶽神社春祭

津屋崎町宮司に鎮座せられる旧摂社宮地嶽神社の春季大祭。本宮より職員が参列する。

一五日
一六日　沖、中両宮春季大祭

旧暦の三月十四日、十五日に当り、大島の中津宮及び沖津宮遥拝所に於て春季大祭が行われる。

一六日　織幡神社春祭

鐘岬に鎮座せられる旧摂社織幡神社の春季大祭、本宮より職員が献幣する。

二九日　天長節　午前十時

今上陛下の御誕生日を祝福して聖寿の万歳と国家の安泰を祈る。

今月の交通訓

○整備第一　安全運転

宗像大社由緒記を発行

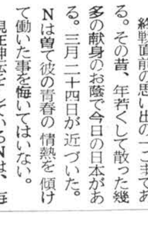
最近御社頭の盛んになるにつれて、参拝者が激増し、中には当社の歴史的由緒を知りたい人が少なくない。殊に、今年正月より開館した宝物館の説明のためには、当然当社の由緒を物語らねばならなくなった。そこで、宝物館の開館に歩調を合わせて作られたのが「宗像大社由緒記」である。

内容は「創始」と「沿革」に分れ、創始に於ては

一、三宮鎮祭の起源
二、沖ノ島祭祀神宝
三、学術書「宗像神社史」「沖ノ島」「続沖ノ島」の刊行
四、三宮一体、連綿不断の信仰を述べ、沿革に
於ては
一、宗像神の国史所見
二、大化改新の神領制定
三、神階昇叙
四、大社の領知関係と大宮司家
五、江戸時代に於ける識者の認識
六、現代の復興運動

等について述べられている。

A5版、僅か七頁の内容ではあるが大要をつくしているので、関係者に喜こばれている。



宗像四郎氏貞（二十四）

山下半可　作
福田長庵　画

氏貞入国 （三）

若年乍ら氏貞も家臣らのこの様子を見て喜んだ。采配を上げると

「吾れ筑前に打入る首途の戦なれば、一人も残さず討取るべし。殊に敵は小勢なるぞ」

いいもはてず軍兵が馳け出した。

岡ノ城主は大友方の領袖瓜生左近貞延である。去る天文四、五年の頃、彼は朋輩の田原大夫や田北刑部らと共に豊前表より宗像領に侵攻し、宗像郡四ツ塚連山に境を接するこの岡ノ城主麻生河内守を倒して、そのまま居据っていたのであった。

寄せ手は陶、宗像勢の連合軍、一兵も残さず討ち取れと馳け出した軍兵らは、全員猛虎のごとく襲いかかった。

この不意打ちに会って城将瓜生左近は一たまりもなく降参した。

彼も氏貞の後楯となった者が陶入道であることは知っていた。一戦するよりも時流を知って降参する方が賢明であると、突嗟に判断したものであろう。

氏貞は、弓の弦を外して何等抵抗する意志のないことを表明した麻生を許した。

先ずは幸先よしと、家臣の米多比修理進と秦次郎左衛門の両人が城番として残された。かくて「遠賀千町」は再び宗像領に復したのである。

瓜生は、其の後宗像の家臣吉田兵部少輔貞勝の婿になって吉田と改姓し、氏貞の近習となって仕えることになったと云われる。

氏貞はそのまま名残の城に入って、氏続良喜入道に面会した。そこで氏貞は宗像宮の祀官深田刑部氏栄、占部日向守惟安を師として祭祀法の伝授を受けた。彼はここに約六カ月滞在して宗像宮の大宮司兼大領（領主）としての研鑚を積み、一方今後の方策について種々思いをめぐらして過した。

緒戦は成功を収めた。しかし先代氏男の時代に近隣より蚕食された旧領を恢復しなければならない時に、東には九州の雄大友義鎮、西にはすぐ隣郡粕屋の立花鑑載、肥前の竜造寺隆信、薩摩の島津義久らが虎視眈々と筑前を窺っていた。近隣は氏貞の動きを見守っていた。家中も亦或る意味では同様であったかもしれなかった。つまり、新しく入国した主君氏貞という人物は未だ若年ながら如何なる働きをし、また如何なる治め方をするかという点であった。

領内山田村に逼塞する故氏男の室菊姫と母君の山田後室（故正氏の室）は、陶入道の命令で粕屋郡新宮浜の沖にある藍ノ島（相ノ島）に流されることになっていたし、先代氏男の義理の舎弟にあたる三才の千代松丸は、今は鞍手郡山口の里に母君の弁ノ前と共に逃れてはいるが、これ亦陶入道の厳命によって亡きものにされることになっていた。

宗像の家臣の中には、旧主筋にあたる人々の処遇について不満を抑えかねる動きがあった事も見逃せなかった。老将氏続良喜入道を擁して旧勢力を伸張しようとする不穏な動きもあったのである。

布石 （一）

翌天文二十一年の二月三日、氏貞は愈々宗像の本城白山城に入った。その年は雪が多かった。去年の暮から降り続いた雪は、殆んど正月中降り続いた。寒中の移動を避けて、この四五日漸く春めいたのをしおに本城入りをしたのであった。

これに先立って、氏貞入国について不満のある家臣らの動きは去年のうちに封じられていた。氏貞が鍋寿丸といっていた幼時から守り役をしていた寺内治部丞は、家中の反対分子を直ちに処断した。粛清は迅速を極めた。寺内自身も自分が養育した主君に対して、新領国に於ける働きを見せたくもあったろうし、一つには主君の位置を確立したくもあったであろう。

氏貞も、氏貞を奉じて入国した寺内治部も、実力による実績によってその地歩を立証しなければならなかったのである。

家中に不穏の空気のあることは治部の内偵によってすぐさま分った。

それは去年の九月、氏貞の入国直後のことであった。家中の遺臣吉田佐渡入道と同苗内蔵丞らが、氏続良喜入道を奉じて新入国の氏貞らを攻めようと謀議しているということが治部の耳に入った。

十月一日、彼は吉田佐渡らが謀議している現場を急襲した。宗像古文書には此の事を余す処なく表現している。

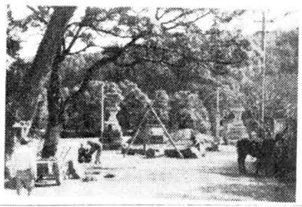
天文廿年九月十二日宗像四郎殿入部の時、上意無く候と雖も、各々これを申し談じ、即時懸り合い勝利候、仍ち討捕り人数、注文共に披露せしめ、封裏してこれを遣わされ候、殊に疵を被られ（左手切疵）しの条、粉骨の次第神妙の趣、其の意を得、態々申すべきの旨に候恐々謹言

同十月二十日　国分若狭守直頼
吉田駿河入道良喜
寺内備後守尚秀
寺内平三殿

（つづく）

宗像大社新年度事業計画

—境内拡張、頓宮整備等—



去る三月五日午前十時より、社務所にて、昭和四十年度予算編成の責任役員会が開催された。

当社では毎年予算の中に新規事業費を予算化し年々着実に神社の整備を進めているが、本年の概要は次の通り決定された。

○境内地埋立

辺津宮神門前に心字池があり、その横の築山に松尾神社が祀られてあるが、交通安全祈願の自動車が年々急上昇に多くなり、神門前の自動車の輻輳を緩和する為、此の場所を平地に整備して、車の交通を円滑にし自動車の収用力を増大させる。

○頓宮整備

先年神湊の草崎半島に頓宮を建設する為、用地を買収したが、本年度より建設計画を立て、工事に着工する。この頓宮は数年前復活された御生祭（海上神幸）の祭場に使用されるもので、これが完成の暁には神湊の名物が一つ多くなるわけである。

○社務所修理

旧官幣大社の神社で全国一の老朽社務所である為、本年は一部修理を行う事になった。

○水源地ボーリング

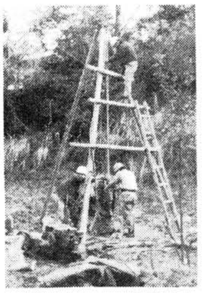
当社は昔から水が少く、境内より一粁程はなれた場所から給水していたが、神社の発展と共に多量の水が必要になったので、新水源地を作り一日百トン以上の給水を行うようボーリングを行う。

○小学校買収

境内隣接地に田島小学校があるが、今回神湊小学校と統合し両小学校の中間地帯に玄海小学校が出来る事になった。田島小学校地は神社の旧境内地でもあり、境内施設拡張上重要な場所であるから、今回玄海町より奉納して頂く予定である。それに対し神社からは教育施設費として金品を寄附する予定にしている。

○中津宮参籠殿建設

大島中津宮境内にある参籠殿が老朽化した為、新たな場所に新築計画中であったが、愈々具体案が纒まったので、本年度より予算化する運びになった。新しい構想では、参籠の目的だけではなく、青少年育成錬錬場、教養講習、学習指導など多目的に使用出来る様計画されている。



○職舎建設

四年前に神職の職舎を五戸建築したが職員の増加に伴い、不足を生じた為、本年度より新職舎を数戸建設する予定である。

○国有地買収

神湊頓宮隣接地に網懸神社と云う部落の氏神があるが、此の境内地は終戦の神道指令により大蔵省の所有になっている為、このたび当社の飛地境内にする様計画された。この場所が当社の所有になれば頓宮整備の構想が一段と大きくなるので現在財務局と接渉中である。

以上新年度の事業計画の主なものを述べたが、これだけ多くの新規計画を毎年施行出来る事は、神社財政の好転は、勿論の事、当社神徳によるものであり、全国神社界に於ても、当社の隆昌と列を同じくする社は数多くはない。

この他既報の通り、重要文化財色定法師筆一筆一切経四三三一巻も愈々本年度は、文化財保護委員会から、国庫補助予定事業として五百万円予定額が示されたので、本年はまず三百巻の経巻修理が行なわれることになった。

春に想う

うららかな陽ざしにさそわれて高宮に登る。若緑一色の中に名も知らぬ樹の一枝に数輪の白い花がそよ風に揺れていた。

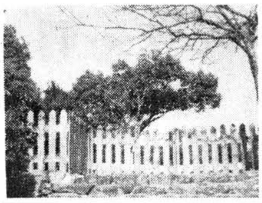
遥かに望めば、大島は玄界灘のかなた、霞の中に浮かんでいる。

と、三人の青年が登って来た。大学に入学した一人を二人の浪人組が祝福していた。

高宮の斎場に低頭して、去る学生達を見送りながら、虚ろな影が心をかすめる。

春の陽はさんさんと降りそゝぎ樹木は新緑に萌え、小鳥の声ものどかに聞こえる。

されど谷間の日蔭の樹々に、南風の渡る日は遅い。人の世のさまざまな明暗と栄枯盛衰が思われた春の訪れを告げる暖かい日射しの中に佇ちつくして、急に淋しさがこみあげた。心の中を虚ろな影が横切る——。



宗像大社宝物館

宝物を訪ねて

鏡

これらの鏡はすべて神様にささげる為に特別に作製されたものと言われている。

四十一面ある中で直径三糎程のものがある。これは大きい鏡を製作する際に、前もってその模型を作って製品の良否を見る為の雛形であろうと推定される。

この様な雛型は鏡の他に剣、鉄製釧（クシロ）、鉄斧等がある。釧とは腕輪の事である。

鏡の腐飾を防ぐ為に裏面に朱を塗った跡が認められる。

沖の島から出土したこれ等の鏡は山城国（京都地方）の鏡とも類似する所が多く文化的なつながりを持っている。

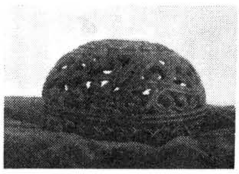
三世紀頃中国から各種の鏡と其技術が渡来し、我が国の鏡作り部が外国の製品を模倣して鋳造した鏡が国家的見地から沖の島の神に捧げられたと見られる

宗像の神が古代に於て如何に丁重に信仰されていたかをこれに依っても窺い知る事が出来る。

香炉状品

全体の姿が香炉状を示している処から名付けられたものである。

用途は全く不明である。不明なる故に国宝に指定する事が出来なかったと文化財保護委員会は言う



この香炉状品は写真の如く、上中下三段に分れている。中帯に双竜唐草文が透彫にされ、上下帯に蓮弁を並べてある。

下端の輪縁に小孔が穿たれているので、ここに他の物としばり合せるか、或は又飾りをつけたものかと推測される。上面に一字が刻まれており、甲か申かいずれにしても十干か十二支で、学者の説によると一連の番号を以って組合せが順序を示す符号であろうと言われている。

製作年代は飛鳥朝から奈良朝頃までと推定される。

三彩片、瑠璃碗残片

三彩片は緑・褐・白のいわゆる三彩が白ー緑ー白ー褐の順にほどこされている。このうち褐釉（上ぐすり）の鮮やかさは正倉院三彩にも見られない程のものといわれる。瑠璃碗残片は、浮出し円文が完成に残っており円文の上面が凹レンズ状になっている。（つづく）

春の結婚シーズン来たる

既報の通り第一回結婚記念植樹祭を行なったが、以降神前結婚申込が祭日、大安の日はもとより毎日のようにあって、係の耺員は嬉しい悲鳴をあげている。

文金高島田にモーニング、或は紋付袴の新郎、新婦の頬も陽光に映え、神前に終生の苦楽を共にと誓う二人の姿はこの上なく美しい。式のあと境内の広場で御本殿をバックに記念撮影する花嫁さんのかんざしがキラくと輝く。

御本殿をバックにした写真が一番喜ばれますよと写真屋さんは語っていた。

当社では結婚式の増加に際して、式場の整備を続けて来たが、この程第一次の計画を完了した。

式場の調度品等は全て一新され、数年前とは格段の違いである。

式場整備については玄海町公民館、及び全町農業協同組合に多大の御協賛をいただいた。

町村往来

◇ファッションショ…6日午後5時と8時の二回、宗像町田熊公民館。宗像香蘭洋裁女学院主催。

◇ミカン巡回指導講習会…農業改良普及所が指導、ミカンのせん定と病害虫防除について9日から19日まで宗像町内で実施。

◇津屋崎町栄養教室修了式…17日午後1時半、青年研修所。二十九人が修了証書をもらう。過去一年間月に一回、宗像保健所吉田栄養士らの指導で、食品の栄養素から調理室の施設、献立てなどの栄養理論の講義をうけた。

◇宗像町田熊村婦人会…17日午後9時半、田熊村公民館。『青少年の育成と婦人会活動』

◇寄付…玄海町上八の入江七郎氏は亡母トクさん（八十七歳）の香典返しとして金一封を岬小学校施設費に。

◇学年末と学年始めの補導強化…20日ー4月20日、宗像署が少年補導員、学校側と一体になり校外補導班を編成、とくに繁華街、駅周辺などを重点にパトロールする。また通学列車関係も鉄道公安員と連絡をとって指導に力を入れる。

◇宗像町村山田公民館の運営委員会…19日午後7時半、同公民館。40年度の分館活動、予算の打ち合わせ。

◇宗像町河東のひまわり会…19日午後1時、河東公民館。ひまわり会は河東部落の若妻たちでつくっている集まり。三年前から定期的に会合して新家庭の建設、よめ・しゅうとの問題など明るい町と家庭づくりを話し合っている。同日は40年度の事業計画を検討。

（西日本新聞より）

宗像大社より養老院にテレビを寄贈

今日はお彼岸の中日、神社でも只今祭典を終り、お訪ね致しました次第で御座居ます。陽気も春めき一段と淩ぎよくなりました。皆様お元気で何卒御長命の程お祈り申上げます。

これは三月二十一日、春分の日に当社久保宮司外耺員二名で宗像町吉武に経営されている、宗像緑風園にテレビを寄贈した時の宮司挨拶の一部である。

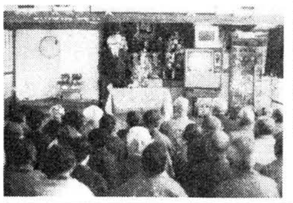
前日毎日新聞に全養老院のテレビが古くなり、修繕もきかず在園のお年寄が大変に淋しがられて居ると云う記事を見、耺員一同計り、早速寄贈する事に決定した。

当日は福間町の西電気商会に取付けを依頼したが、丁度大相撲春場所の千秋楽で殊の外御老人達に喜こばれ、持参の時期がよかった。

其後早速二十四日同緑風園より礼状が当社に届けられたので、ここに掲載する。

前文省略……

扨て此度は在園者一同久しく欲してやまなかった性能の勝れた、テレビを御寄贈下さいきして誠に誠に、有難く御礼を申上げます。今までのより画面も大きく、遠い処からも見られるようになり、ほんとうに喜んで居ります。



昨日は丁度相撲の千秋楽とて、見ない人まで見るという喜びようでございました。冬のはじめには、重油を沢山に戴き、寒い冬も隔日にお風呂を楽しませて戴き、重ね重ねの御厚志ありがたく厚く御礼を申し上げます。

……後文省略

当社では毎年養老院の慰問を行ない、旧臘はお年寄が毎冬、寒さに苦しまれていると云う事を聞き、風呂に使用する重油を寄贈したが、老人を敬い、長寿を祈る事は日本のよき美風でもあり、民族の誇りでもある。今後神社でも社会福祉事業の一環として慰問を計画しているが、何とぞ皆様各位の今後の御援助を切に御願いし、身寄りの無い淋しい方々に少しでも喜こんで戴き、毎日が楽しい日々であるように、そして長寿の程を心よりお祈りする次第である。

×　×

新築完成
—玄海の味・生魚料理—
みなと荘
宗像郡玄海町神湊
電話　神湊　五六番

宗像伝説　其の四十八

郷土の名力士

沖ツ海関

大正十年頃、海軍記念日には宗像大社の境内角力場で、郡内小学校対抗角力が行なわれていた。そして毎年のように南郷小学校の北城戸福夫君が優勝していた。

「南郷は　小学生の角力に青年を出す。」

よそからは度々こんな不平が出た程であった。その堂々たる体躯と小学生らしからぬ快力に対する羨望の声であったろう。

この北城戸福夫君が、やがて身長六尺（一八〇糎）、体重三十貫（一二〇瓩）の巨躯を以て万天下のファンを沸かせた名関脇沖ツ海に成長しようとは、誰が予想したであろうか。

大正十三年の春彼は津屋崎の児玉恒次郎、天野徳太郎の両氏を親許として、大阪相撲協会の千田川部屋に入門した。時に十五才であった。

しかし、入門直後に協会は解散した。この事件は少々彼を失望させたが、一旦志した道であった。

同年五月、彼は東京相撲協会の若藤部屋に入門した。

いかなる名人上手も　始めからそうなのではない。何れも血と涙の精進からの賜物である。沖ツ海の場合も例外ではなかった。

「天下の関取りになってみせる。」

歯を喰いしばっての猛稽古が続いた。何年も何年も—。

大正十五年五月場所で序ノ二段西四十八枚目。この年にしこ名の「上ゲ汐」を「沖ツ海」と改称した。昭和三年（十九才）一月場所で三段目東二十七枚目となった。

昭和四年一月、東京本場所で全勝して、幕下東二十三枚目。

翌五年三月には、大阪本場所で九勝二敗。十両格東五枚目。

同年五月　福岡本場所で九勝二敗。十両筆頭に進んで、郷土人を驚喜させた。

昭和六年三月、京都本場所で八勝三敗。幕内東前頭九枚目。

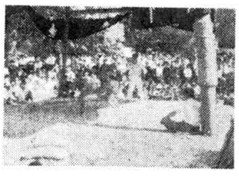
同七年三月、名古屋本場所で九勝二敗。幕内東前頭筆頭。

同年五月、東京本場所で六勝二敗、九月京都本場所で九勝二敗。愈々東関脇へと進んだ。

此の間に、天下の名勝負が二回あった。一回は昭和六年秋の大阪本場所に於ける武蔵山との一戦であった。八日目迄無敵の進撃を続けていた強豪武蔵山は、この時の沖ツ海の下手投の連発に屈し、而もその際右腕を骨折している。

もう一つは昭和八年の正月東京本場所に於て男女川を破った一戦であった。

宗像の一郡はおろか、九州が湧き立った。沖ツ海は横綱になるに違いない。頑張ってくれよ。



宗像郡には「沖ツ海後援会」（会長中村堅太郎）が出来て、無数の声援が送られた。

——だが、天は彼に幸いしなかった。

昭和八年九月、萩市にて興行中に、料理の中毒のために急逝。享年二十四才であった。

彼は、一度土俵を下れば、誠に宗像人らしい真面な温和しい、またどこ迄も情誼に厚い青年であった。

十月五日、大穂の宗生寺に於ける彼の葬送の日、全国から集まった会葬者は千余名、弔電の数は二百三十二通に及んだということでも、その盛儀のさまが偲ばれる。

「——君資性温厚寡言にして悠容迫らず喜怒を色に現わさず惜に大成の器たり。其の師父に接するや、孝養の志深く、其の人に交わるや信愛の念厚く、温容玲瓏玉の如し、而も一度土俵に現わるるや、其の度胸と勇気とは正に龍攘虎搏敵を恐れず弱敵を侮らず—。」

後援会長中村堅太郎氏の弔辞が故人の「英姿颯爽ぶり」を称えたのであった。古い人達はまだ知っている筈である。（H）

宗像大社献詠
俳句作品集（廿九）

津屋崎　井浦　良介
海女となりし黒髪をぶっつりと切る
〃　毛利　夜潮
矢大臣の女顔におはし太刀捧ぐ
〃　白石百合蔵
掌にのせし卵の温み春兆す
〃　西住喜三郎
百千鳥つづらまがりの谷降りる
〃　占部　河童
厨より風雛の青き頭を揺らす
〃　岩見佳代子
山写す湖面に芝火燃え移り
〃　勝田　光一
花曇り夜の重さに樽ころがす
〃　安部真佐子
犬葬る夕日に黝く蕗の薹
〃　久羽　文王
春寒や面接の子の素直なる
〃　香立喜一郎
吾子写せし自動扉に蕨見す
門司　永島　鳴朗
父のふむ道に岐路あり薄氷
東郷　小野　淡坡
雛節句亡母自慢の古人形
〃　小野　花居
何思ふ子亀の甲に春の風
厚狭　篠田　南洞
陽炎や旨き井戸ある踏切小屋

日立と共に五十年

倉田主税会長の半生記

（十一）

普通の時、普通の事をするのであれば、自力の限界を心得て行動するのが賢明であり、確実である。然し一旦非常の事態にぶっかった時には、それではラチがあかない。どうしてもしなければならない時には、敢て自力を超えて進まなければならないのだ。その時に必要なのが精神力なのだ。換言すれば、普通の状態における″不可能″をなんとかして″可能″ならしめる原動力が精神力なのである。非常事態に直面した時、精神力に支えられた人間と、そうでない者との間には、驚く程のちがいを生ずる。心構え一つで″無理″が無理でなくなるのである。″不可能″が″可能″になるのである。

かくして一年間の軍隊生活を、主税は優秀な成績で除隊した。

大正四年十二月、二十七才の時彼は結婚した。七十才を越えた現在でも彼はなかなかの好男子である。年令よりもずっと若々しい感じがする。二十台ごろの彼は、定めし異性の関心を引いたことゝ思われるが彼にはロマンスらしきものが一向になかったようである。そしてこの結婚についても、ロマンスは一切ない。旧日本式で極めて普通とされた″見合結婚″である。新婦は信子といって、彼よりも七才年下の二十で、福岡の旧家鳥井家のむすめである。父は鳥井卯平、母はタマといい、彼女はその三女として生まれた。これより先、主税の父主米造は、親戚や知人にむすこの縁談を頼んでいた。こちらから依頼するまでもなく、″神興村の倉田家ならぜひ″といって、先方から申し入れてくるのが少なくなかった。然し所謂″帯に短し、タスキに長し″で両親の眼から見て″これは″と思うようなむすめは仲々見当たらなかった。ひょっとすると、むすこ自身″意中の人″がありはしないかと考えて見たが、それらしい様子は一向になかった。はっきり手紙で問い合わせても″何卒御両親様に於かれて宜敷御銓衡賜わり度″と、まことにあっさりした返事である。いささか気をもんでいるところへ弟がこの縁談を持って来た。写真を見ると仲々美しい人である。「このむすめさんなら、倅も気に入るのではあるまいか」そう思った両親は、主税のところへその写真を送ってやった。折返して彼からの返事が来た。″御両親様に御一任申上候″という文面から見ると、むすこもこの話に乗り気であるらしく思えたので、早速段取りをつけ見合いということになった。写真で見たよりも更に美しい人である。立居振舞も極めてしとやかで、且つ作法にかなって一点非の打ちどころもない。さすがに、その頃の少女であるから顔を赤らめてうつむいているが、彼女の眼は英知に輝き、やさしさが溢れていた。「愛情ゆたかな女性らしい」直感的に主税はそう感じた。家に帰ると、早速母のシナは、むすこの気持をたしかめた。「あんたの気持次第で話を決めたいと思うが」それに対して主税は、はっきりと答えた。「いいむすめさんです。先方にご異存がなければいただきたいと思います」これで話が決った。鳥井家の両親も、話を聞いていた倉田家の嫡男が、噂以上に立派な男性であることにすっかり満足していたのである。当の信子も、恥じらいながらイエスを言ったので、ここに目出度く華燭の典を挙げることになった。

星霜四十七年……。金婚式を迎える日も近い今日、彼女は良き母として、よき祖母として、且つ賢明なる主婦として、夫の身辺にかしづいている。

大正三年、第一次世界大戦が勃発した。日本は、日・英同盟のよしみを以て、ドイツ帝国に対し宣戦を布告した。そして陸軍はドイツが租借していた中国の青島要塞を攻撃して、これを降した。然しこの大戦において、我国の立場は連合国の一員として戦うよりも、むしろ兵站部として物資調達の役目を引き受けた形であった。従って外貨はどしどし流入して来たので、国としては大儲けをする機会に恵まれたのである。国内の産業はにわかに発展し、殊に工業生産力は急速度に上昇し、産業界は空前の大活況を呈したのである。日立製作所も又、この好況を反映して機械類の註文がさかんであった。工場はほとんど昼夜兼行といった有様で、休日も返上したいほどの忙しさであった。然し、仕事は必らずしもスムーズに運ばれていたとは言えない。それは外部に発註した鋳物や銅材などが、約束の納期に遅れ勝ちであることが原因だった。註文は益々増えるのに対し、外部へ出した発註品は次から次へと納入が遅れる始末である。折角、九分通り組み立てても、ほんの僅かの部分品が足りないため、完成することが出来ず、手を拱いて積んで置くほかないのである。だから製作の工程は一々外註品の納入にかかっていた。機械が完成するのもしないのも全く外部の者に牛耳られているのと同然であった。それ迄、約束の実行について日立は絶大な信用を受けていた。納入の期日を違えたりするようなことは絶対になかったからである。ところが、事態がそうなったので、厭でも応でも違約する結果となり、註文主から手荒い文句をきかされる破目になったのだ。小平は居ても立ってもおられなかった。折角築いた日立製作所の信用が次第に失われるかと思うと、身を切られるより辛く悲しかったのである。違約を詫び、遅延の申訳を言うのは、全く痩せる思いであった。

「いくら自分が真面目にやっても、外部に依存する部分があるのでは、到底思うような経営は出来ないだろう。この先、またどんなことで同じような事態に逢着するか分るものではない。その度に今と同様の窮地に追いこまれるのでは不本意千万である。」彼はそう考えた。折角今まで寄せられた信用を確保し、今後絶対に註文主に迷惑をかけないために如何なる方策をとるべきかについて慎重に検討を重ねた。そしてついに彼は一つの方針を打ち出したのであった。

材料を自給自足することーーこれが彼の立てた大目標であった。外部に発註した品物のなかで一番大きな比率を占めていたのは銅線であった。言う迄もなく、電気機械の組み立てには夥しい量の銅線を使うのである。一番普及されているラジオ、テレビを見ても分るとおり、電気機械というものは銅線なしには絶対に作ることが出来ないのである。逆に言うと、銅線は電気機械メーカーにとって、この上もない必要材料であるのだ。従って先ず銅線を作る計画が樹てられた。「それにしても、誰にこの仕事をやらせたらよいか」小平が先ず最初に考えたのはこのことである。折角の構想も、それをやりとげるだけの人物が得られない限り、画に描いたモチと同じである。小平はその人選について慎重ならざるを得なかった。「事業は人にある。人材次第で伸びもするし、反対に人材が得られなければつぶれてしまうのだ」部下の意見も勿論聴取して参考にした。結局、小平が新しくはじめる銅線の仕事の全責任者として白羽の矢を立てたのが鉄板工場で働いている主税であったのだ。小平は主税の人物についてよく観察をしていたのである。同僚たちが不満のあげく辞めて他に出て行くなかにあって、心中の不平はあるであろうのに、一切口には出さず、黙々として仕事をしている主税の姿は、小平の眼には″信頼するに足る青年″と映ったにちがいない。

あゝ常陸丸

（十）

そのころ保険の関係で行なわれた新造船の検査は　英国のロイド協会が各国に検査員を派遣して、受け持っていたが、常陸丸の検査にはロバートソンという人が当たった。ところがこの人は、造船所の幹部と意見が合わずあまりに検査が厳格すぎたため荘田さんはロイド協会の本社に抗議したのです。本社からは技師長が直接調べにやって来たが、その結果、造船所のいい分が通って常陸丸は無事完成しました。抗議したときは、もうだめかと悲観したが、とにかくこの事件でわれわれは非常な自信を持ったのです。」

時に明治三十一年のことであったこのような経緯があってから我が国の造船技術は常陸丸建造を契機として急速に進展した。間もなく一万トンクラスの天洋丸、地洋丸が我が国の技術と資材とで造られた。かくて第一次世界大戦の頃には大阪商船は優秀船を量産して外国船を圧倒し、ニューヨーク航路をほとんど独占するに至ったのであった。

其の後順調な発展を見せ、商船軍艦共に世界の最高水準を行くに至り、大東亜戦争の直前には戦艦武蔵、大和という巨艦の出現さえも見るに至り、名実共に造船部門に於ける世界のトップに立った。

我が国は大東亜戦争によって、戦前の保有量六百万屯の航洋船を殆んど失い、終戦時の商船隊は百万トン余りに減ってしまった。しかもそのうちの九割が戦時標準船というみじめさであった。しかし占領政策のゆるんだ昭和二十五年頃から航洋船の建造がはじまり、朝鮮戦争にはじまる船舶の大需要がこれに拍車をかけ、現在ではついに英国を抜いて、竣工量百五十三万八千トンで世界第一位にのし上っている。

その後、三十一年のスエズ動乱で再びブームが訪れ、現在はその反動で建造量が落ちて横這いを続けているが、船舶のバランスは次第に回復してきている。三十七年の十月には出光興産の十三万トンタンカー「日章丸」が進水した。

さて常陸丸の諸要素は次の通りである。

○船質	鋼製
○推進器	双螺旋
○船形	スクーナー型
○公称馬力	三百十一馬力
○船長	四五二、七七フィート
○船巾	四七、八〇〃
○深さ	三〇、三〇〃
○総トン数	六千百七十五トン
○登簿トン数	三千八百二十九トン
○時速	十四マイル

常陸丸船長の殉難

常陸丸の船長は英人マミラン氏である。彼は早くから日本郵船に職を奉じ、常陸丸の最後と共に殉難する迄二十年間勤務した。曽ては日清戦争にも船長として活躍し、我が国の為にも尽すところがあった。日清戦争後の飛躍的発展途上の日本に於て彼は非常なる期待と興味を以て働いていたと伝えられる。その人物たるや濶達、その勤務たるや責任感に溢れ、真に友好国人たるの偉才であった。日露の戦い半ばにしてこの人物を失ったことは惜しみても余りあるものがある。

○常陸丸と運命を共にした者

日露戦争実記によると左の通りである。

聯隊長歩兵中佐	須知源次郎
大尉	島倉　栄吉
〃	橋本　省三
〃	三島栄太郎
中尉	松崎辰五郎
糧食縦列大尉	永吉充五郎
中尉	長尾　庸三
少尉	大久保　正
〃	小林　倉太
〃	三上　景忠
〃	吉川　貞樹
〃	勅使河原欽哉
	浅輪　昌之
〃	小山申太郎
〃	三沢　荘衛
歩兵中尉	柏木徳太郎
海軍中佐	山村弥四郎
少尉	尾崎佐太郎
軍曹	天笠　武熹
歩兵少佐	山県　俊信
軍曹	柏　直三
〃	中島　信治
〃	阿部　元助
〃	山崎　時蔵
〃	川島　艶吉
〃	島根豊五郎
〃	大友　寛三
〃	酒井勝次郎
〃	大石　清八
〃	伊藤長三郎
〃	佐藤　岡平
〃	高橋重太郎
〃	梶山亀太郎
〃	臼田亀之助
〃	川上拾太郎
〃	米川高四郎
〃	倉田　敬
〃	佐藤清次郎
〃	森田　五郎
〃	池ケ谷万吉
〃	行形勝三郎

（以下次号）

小学生の作文

これは去る二月九日、玄海町山ノ上部落の公民館に於ける「子供会」の席上で読み上げられた作文である。いかなる生活条件の中に在っても、じっと周囲を見、自分を考える姿がここにある。集ったお父さんや、お母さん達の中には、此の作文を聞いて泣いている人さえあった。敢てここに掲載した所以である。

わたしのおばあちゃん

二年　みやもとすみよ

わたしのおばあちゃんは、ことし五十九になります。まい日、わたしの家のごせんぞさまに「きょうもいちにち、はたらかせていただきます。」といっておまいりしております。わたしもおばあちゃんのとおりにしておまいりしております。そして、学校にいきます。わたしは、べんきょうができるように、おまいりしております。おばあちゃんは、ごはんをたくときも「ありがとう」といって、かんしゃしています。わたしは、おばあちゃんが一ばんすきです。はたけからかえってきても「おるすばんありがとう」といってかんしゃしています。おばあちゃんは、いつもそうしてまいっています。「ありがとうございます」と、いつもいつもいっております。わたしも、おばあちゃんのように、なにごとにもかんしゃしようとおもっています。　おわり。

ぼくのおかあさん

五年　金本　武士

ぼくのおかあさんは、ゴルフ場につとめています。まい朝五時におきて、食事の用意をします。それからぼくたちをおこして下さいます。ぼくたちがおきる時間は六時ごろです。おかあさんは、ぼくたちをおこすと　仏さまに「きょうも一日ぶじでありますように」とまいっています。そして、ぼくたちも、おまいりします。おまいりが終ると、食事にします。おかあさんのしゅっきんは、毎日七時か七時十分ごろです。そしていっしょうけんめいに働いて、ぼくたちを学校にやってくれます。しごとが終って帰ってくるのは、六時ごろになります。おかあさんは「きょう一日ぶじでありました。」と仏さまにおしらせします。ほんとうに、ぼくのおかあさんはえらいと思います。ぼくは早く大きくなって、おかあさんを大事にしてあげようと思っています。

もし私がおかあさんだったら

五年　法村月美

私がもしお母さんだったら、子どもたちの悲しみ、苦しみ、よろこびなどをいっしょにあじわってやりたい。もし子どもが喜んでいても、親がよろこんでやらないと、子どもは、かなしむだろう。やっぱり、親子そろって、悲しむ時は悲しみ、喜ぶ時は喜んでやるのが親の愛情というものではないのだろうか。私がおかあさんだったら、そういうことを守ってやりたい。そして一週間に一度、家族会議というのをやって、子どもが親にたいする意けん、親が子にたいする意けんなどを話し合って、もっともっと明るい家庭にしたい。今の家庭は、ほとんど家族会議というのをやってないだろう。私の家なんかは、いつも家族がそろっていないので、しかたがないが、ほかの家は、一日に一度は家族がそろうだろう。そんな家庭は、家族会議をしたほうがいいと思う。

私は、いくら貧しくとも、この二つだけは守っていきたいと思う。そして、いくら私が仕事をしなくてはいけなくなっても、仕事と家庭をいっしょにしたくない。

これだけが私のおかあさんになってからの願いです。

（一頁よりつづく）

武丸　立石ろせの
ふるさとの舗装されたる道を行くでこぼこ道の遠き日思ひて
戸畑　山磨　昌子
めづらしく日曜を家に居る夫の冬陽あふるゝ庭に芝植つる
大井　安部　重郎
植ゑしまゝ埋もれし杉の下刈をすませ明るく空透きて見ゆ
〃　安部　静子
春浅き小庭の隅のチューリップ稚き二葉に淡雪の降る
〃　吉田　杏子
鳳雛の巣立ち行く日よ若人は胸を張りつゝ校庭を出づ
勝浦　永島　計七
福博の近代都市美海はるか静かに抱く志賀の島宿（国民宿舎）
村山田　金丸　柳蔵
馬の背に大鞍をいて通ひきし山はドライブウェーとなりぬ
東郷　藤田　信子
霜の朝残せし娘等の靴跡に頭もたげし犬ふぐりの花
吉武　原田　松代
ま白き小梅に雪はふりかへり花びらか雪かと手にうけて見つ
〃　原田　リノ
南うけて陽溜りぬくき縁の下に茣蓙しきて姑も切干切りき
田島　白雲　山人
助けたりと救難艇の声ひびき荒るゝ浜辺を灯は乱れ飛ぶ
宮田　片山　朔子
或る期待抱きて急ぎ来し街にネオンやさしく点きはじめたり
平井　河野　静子
すこやかに八十一を迎へたる父を祝ひて集ふはらから